

明治10年(1877) S.M.タゴールが日本に寄贈した インド楽器と音楽書

塚原 康子

はじめに

1870年代に、カルカッタ在住のインド人音楽学者 S. M. タゴール(Sourindro Mohun Tagor, 1840~1914)がインド楽器と音楽書を欧米各国に贈ったことは、とりわけベルギーに贈られた楽器の管理にあたったヴィクトール＝シャルル・マイヨン(Victor-Charles Mahillon, 1841~1924)が楽器学の四綱分類法を考案する契機となった事跡として名高い。

一方で、1879年に創設された東京芸術大学音楽学部の前身である文部省音楽取調掛の蔵書の中に、多数のインド音楽書が含まれていることも早くから知られていた。山住正己は「これら主としてインドの音楽・演劇関係の書籍は、音楽取調掛が選定のうえ買いいれたものか、だれかの寄贈をうけたものかわからない。しかし、その後の取調事業をみると、音楽取調掛の人たちがこれらの本をえらんだとは思えない」と指摘している⁽¹⁾。しかし、以後もその来歴や収蔵の経緯に特段の関心が払われることはなく、結果的に、音楽取調掛がなぜこれほどのインド音楽書を所蔵していたのか、その理由も解き明かされなかった。まして、音楽書とあわせて日本にインド楽器3種が贈られたこと、さらにそれに対する返礼として日本からインドに雅楽器一揃(12種)が贈られた事実は、これまで全く知られていなかったといつてよい。

本稿は、これらのインド楽器と音楽書とが、明治10年(1877)に S. M. タゴールから日本の皇室に贈られたものであったことをまず明らかにする。その上で、現在も東京国立博物館と東京芸術大学附属図書館とに現存するインド楽器と音楽書の調査結果を報告し、19世紀後半のインドと日本との音楽交流について考える。

1 インド人音楽学者 S.M.タゴール

S. M. タゴールは、ベンガルの名家として知られるタゴール家に生まれ、初期のインド人音楽学者として欧米に名を馳せた知識人である。ただし、S. M. タゴールが属したのは、1913年にアジア人初のノーベル文学賞を受賞し作曲もしたラビーンドラナート・タゴールが属したジョラサンコのタゴール家とは家系の異なる、イギリス植民地支配下に誕生した新興資本家であるパトゥリアガタのタゴール家であった。S. M. タゴールとその活動については、井上貴子が『近代インドにおける音楽学と芸能の変容』(2006年)の第1章「東洋学の時代——18世紀末—19世紀」において、1節をあてて詳しく論じており⁽²⁾、ここではそれに拠りつつ、キャプウェルらの先行研究および東京芸術大学附属図書館所蔵のインド音楽書の記述等で補いながら叙述をすすめる。

S. M. タゴールは、ヨーロッパの新知識をインドの青少年に与える目的で1816年にカルカッタに創設されたヒンドゥー・カレッジに、9歳から9年間にわたって学んだ。彼は、音楽ホールを建設し作曲もした祖父(Gopi Mohun, 1760頃~1818)や、それを受け継ぎながらシタール、サンスクリット語・ペルシア語・英語を学んだ父(Haro Kumar, 1796~1858)に倣って、サンスクリット語やシタールを学ぶ一方、ドイツ人音楽教師からピアノを習い西洋音楽の基礎を身につけた。それゆえに、ベンガル語のほかに英語でもインド音楽に関する多くの音楽書を出版し、みずから作曲も行うという非常に多能な人物であった。また、1865年に兄(Jotindro Mohun, 1831~1908)が創設したパトゥリアガタの劇場を運営するとともに、1871年には私財を投じてヨーロッパの音楽学校をモデルにしたベンガル音楽学校 Bengal Music School を設立してその校長となり、1881年にはベンガル音楽研究所 Bengal Academy of Music も設立し、没落した宮廷に代わるインド音楽の新しいパトロンとしてその近代的な教育と普及に貢献した。

S.M.タゴールの名が欧米に知られるようになったきっかけは、インド音楽に関する音楽書出版と、欧米各国に対するそれらの音楽書およびインド楽器

の寄贈によってである。なかでも英国オックスフォード大学やベルギーのブリュッセル楽器博物館に現存するインド楽器のコレクションは今日でもきわめて有名であり、とくに100点に近いインド楽器を所蔵するブリュッセル楽器博物館のコレクションは、寄贈当時館長を務めていた V. -C. マイヨンが、S. M. タゴールが添付した音楽書の、『ナーティヤ・シャーストラ』に基づく分類法から、近代的な楽器学の基となる四綱分類法を案出したことで知られることは初めに述べた。

S. M. タゴールによる音楽書と楽器の寄贈について、今日まで詳細な情報を伝えているのは、1876年に刊行され、その後も増補が加えられた *Public Opinion and Official Communications about the Bengal Music School and Its President* (音楽取調掛での訳は『公報及輿論』) である。この書には S. M. タゴールの著書リスト、ベンガル音楽学校およびタゴールに関する新聞雑誌記事、楽器と音楽書の寄贈を受けた各国からの礼状などが収められている。後述するように、東京芸術大学附属図書館には1878年1月の礼状までをふくむ増補版と、1879年9月までの礼状をふくむ増補版の2本が現存する。

それによると、S. M. タゴールの寄贈は1876年から行われ、寄贈先はヨーロッパではイギリス・フランス・ドイツ・オーストリア・ベルギー・オランダ・デンマーク・イタリア・ハンガリー・ポルトガル・スイス・スペイン・ノルウエー・スウェーデン・ロシア・ギリシア・ローマ教皇領に及び、ヨーロッパの主要国をほぼ網羅している。ヨーロッパ以外では、アメリカ、南アフリカ(ケープ植民地)、オーストラリア、エジプト、アジアではシャム・ビルマ・ネパール・セイロン・日本・中国に寄贈がなされたことが、礼状から確認できる。これらの諸国・地域からは、S. M. タゴールに対して答礼にメダルや数々の称号(1878年以降に刊行された著書のタイトルページには、各国から贈られたこれらの称号が鏤められている)、国王の写真などが贈達された。しかしながら、バラモンの出である S. M. タゴール自身はカーストの定めを守り、生涯ただ一度もインドを離れることはなかった。

ヨーロッパ諸国に対する寄贈が周知の事実であるのに対して、同時期に S. M. タゴールが他ならぬ日本にも楽器と音楽書を贈っていたことが知られなかったために⁽³⁾、東京芸術大学附属図書館に現存するインド音楽書が注目

されることも、同様に東京国立博物館に所蔵されるインド楽器が調査される機会もなかったのである。

つぎに、順を逐って日本への寄贈の経緯をみてゆきたい。

2 S.M.タゴールによる日本へのインド楽器・音楽書の寄贈

S. M. タゴールによるインド楽器と音楽書の寄贈については、『明治天皇紀』の明治11年(1878)8月17日条⁽⁴⁾に、つぎのような簡潔だが明快な記述が見られる。

曩に印度国カルカッタ貴族ソミンドロ・モハン・タゴン、同国に於て現今用ゐる所の楽器三種及び音楽書一函を英吉利国公使館を経て献る、是れ独逸・澳地利・伊太利・英吉利其の他欧羅巴の諸国皇帝に贈呈せるものに同じと云ふ、仍りて本邦中古の楽器を答酬することと為し、是の日、宮内省、拍子・神楽笛・笙・箏・箏・笛・狛笛・和琴・琵琶・箏・羯鼓・太鼓・鉦鼓並びに各附属品を外務省に交付して、タゴンに贈達することを託す、□金穀録

このように、英国公使館を介して、前節でみたヨーロッパ諸国に贈ったものと同様の楽器と音楽書のコレクションが皇室に献上され、それに対する返礼として日本の雅楽器一揃が贈られたことがわかる。『明治天皇紀』にS. M. タゴールの名が登場するのはこの個所のみであり、「ソミンドロ・モハン・タゴン」(ただし後述する宮内庁書陵部蔵の公文書では「ツミンドロ・モハン・タゴン」と記載されているのは、寄贈を受けた際に作成された文書での音訳が踏襲されたためと推測される。

しかし、『明治天皇紀』では「曩に」とあるのみで、寄贈を受けた時期ははっきりしない。これを明らかにしてくれるのが、日本から届いた外務卿・寺島宗則から英国公使ハリー・パークスに宛てた1878年8月29日付の礼状⁽⁵⁾である。それによると、S. M. タゴールが楽器と音楽書に付した書簡は1877年12月20日付で、礼状の末尾には、日本からS. M. タゴールに贈る12種

の楽器リストが付されていた（〔 〕内は筆者）。

- A pair of time-beaters.〔笏拍子〕
- A kagura flute.〔神楽笛〕
- A mouth-organ.〔笙〕
- A flageolet and reed.〔篳篥〕
- A flute.〔龍笛〕
- A koma flute.〔高麗笛〕
- A Japanese harp with bridges.〔和琴〕
- A lute with plectrum and strings.〔琵琶〕
- A harp with bridges and finger-tips.〔箏〕
- A gong and sticks.〔鉦鼓〕
- A large drum and sticks.〔太鼓〕
- A small drum and sticks.〔鞞鼓〕

返礼に贈られたこれらの雅楽器一揃については、宮内庁書陵部蔵の『雅楽録』明治11年第11号「印度貴族「ツミンドロモハンタゴン」ヨリ同国楽器類献上ニ関スル件」がさらに詳しい情報を伝えてくれる。

それによると、明治11年(1878)2月16日付で外務卿・寺島宗則から宮内卿・徳大寺実則に、「楽器類を献上したS. M. タゴールへの報酬品について問い合わせがあったが、日本の雅楽器のうち相当の品を取り揃え贈与するのがよろしく、送付は英国公使に依託する積りであるので、贈達用の楽器が揃い次第知らせてほしい」旨の文書が届いた。したがって、少なくとも2月にはインドから楽器と音楽書が日本に到着していた。これに対して、2月20日付で宮内卿から外務卿に対し、「報酬品についてはすでに式部寮雅楽課に調査させているので、楽器が揃い次第回付する」という内容の以下の文書が送られた。

印度貴族「ツミンドロモハンタゴン」ヨリ同国楽器類献上ニ付御報品ハ
日本中古之楽器之内相当之品取揃御贈与相成可然且送致方之義者英国公

使へ御委托可相成旨云々御申越之趣致承知候右御報酬品之義者既ニ式部寮雅楽課ニテ取調為致置候間相調次第御廻可申候条此段御答申入候也

十一年二月廿日

宮内卿徳大寺実則

外務卿寺島宗則殿

追テ貴族ヨリ差出候書簡本書御返戻申入候也

追記にあるように、この文書には S. M. タゴールの書簡が添付されていたようだが、残念ながら写しは残っていない。そして、S. M. タゴールに報贈する雅楽器一揃について下問を受けた式部寮雅楽課の岩田通徳から、2月20日に式部頭・坊城俊政に対して次のような上申がなされていた。

楽器献上之外国人へ皇国楽器御報贈可相成ニ付右御品及御買上ケ代価等見込可申上御下問之趣熟考仕候处皇国楽器一具与申候得共拍子と琴三管三鼓二絃ニ可有之右者新造被命候共急速之事ニ者相調中間敷其上極而高価其品者却而古器ニ者及不申依而可然古器御買上ケ外見不宜場所者改飾補修等仕候ハ、外見モ宜敷廉価ニ而相揃可申候乍併只今何れニ何品有之代価及御手入費何程ト申確定之儀モ無之候得とも凡四百四五拾円ニ而相揃可申御袋及外箱等ハ是非新規ニ無之而者相成間敷桐箱ニ仕立候ハ、右代凡四百四五拾円ニモ可相成合金六百円内外ト見込申候尤公然楽器師等へ御用ニ而者右見込ヨリ必騰貴可相成ト存候前書申上候者凡人之買入手入費ニ有之候御品ニおゐる者外国へ御贈相成候者見苦敷儀無之程之見込ニ御座候此段上申候也

すなわち、「楽器を献上した外国人に報贈する我が国の楽器購入代価等の見込みを下問され熟考したところ、我が国の楽器一揃とは笏拍子・和琴に三管(笙・箏・笛)・三鼓(太鼓・鉦鼓・鞆鼓)・二絃(琵琶・箏)となろうが、新たに製作を命じられても急には調わないだろうし、その上きわめて高価でありながら品質は却って古器に及ばない。ここは然るべき古器を購入して改飾補修すれば外見もよく廉価で揃うだろう。現時点でどこにどの品があり代価や補修費がどれだけかかるとは確定できないが、楽器は補修費も含めてお

よそ440～450円、楽器を容れる袋や外箱はぜひ新調しなければならず桐箱に仕立てるならばおよそ140～150円、合わせて600円内外、と見込まれる」としている。

面白いのは、最後に「楽器師等に正式に発注すればこの見積もりより必ず高くなる、あくまで普通に購入・補修する品で外国に贈っても見苦しくない程度の見込みである」と述べていることである。江戸期以来の楽器師として維新後も活躍し、明治6年(1873)のウィーン万国博覧会への雅楽器等の出品や正倉院楽器の模造品製作などに携わった神田重助のことをさしているのかもしれない。

この上申をした岩田通徳は旧旗本で、幕末には大目付として国事に奔走した人物だが、維新後は静岡に移住し掛川奉行などを務めたのち明治政府に仕え、当時は式部寮四等属として飯田橋・富士見町の雅楽稽古所に勤務していた。そして、折しも同じ2月には、これに先だって1878年パリ万国博覧会の音楽展示への出品も式部寮雅楽課に要請されており、楽器(雅楽器一揃)・楽譜・舞楽図・解説書の調達と作成に事務方の責任者として伶人たちとともに取り組んだ人物でもあった⁽⁶⁾。パリ万国博覧会への出品物は、解説書『日本雅楽概弁』をのぞく品々が6月26日に横浜からフランスへ送られ、解説書は英文版が作成されて8月に追便で送られた。

こうしたパリ万国博覧会への出品物準備と並行していたためか、インドに贈る雅楽器一揃の調達はやや遅れ気味だったようで、5月13日付の外務省からの照会(催促)を受け、6月28日付で式部寮から本省(宮内省)に宛て「8月頃にしか出来上がらない見込み」である旨を通知している。7月17日付の雅楽課からの文書によると、遅滞の原因はこの年は霖雨のため湿気が格別つよく蒔絵等の仕上げが遅れたことにあり、ようやくすべての楽器が調い本省に納められたのは8月17日であった。その後、楽器は外務省に交付されたが、9月3日付で外務書記官から宮内書記官に、「インドに楽器を贈るにあたり1つ1つ箱入れするため、ばらばらになり現地での組立等に差し支えが生じるかもしれないので写真を添えたい。(楽器について)心得のある官員を4日9時に派遣してほしい」と照会があった。日本の楽器を初めて実見する外国人への贈達に配慮して、さまざまに心配りがなされたのである。

パリ万国博覧会への出品にあたっては、会場での展示について詳細な指示書（「日本楽ノ諸物品ヲ博覧会場ニ陳列スル心得」）と略図が添えられていた⁽⁷⁾。たしかに、箏や和琴の柱を立てるには図か写真がある方がよいだろうし、琵琶の調弦法にも指示が必要である。それらを含めた諸々の説明のために、雅楽の起源・歴史、理論、楽譜・楽器・演奏形式等を簡潔に解説した『日本雅楽概弁』が編纂され、英文版が作成されたのも当然であろう。

こうして日本から贈られた雅楽器一揃は、S. M. タゴールの許に確かに届き、現地の新聞でも報道されていた⁽⁸⁾。S. M. タゴールは、世界中の国々に楽器と音楽書を寄贈したが、その返礼に自国の楽器を贈ったのは、*Public Opinion and Official Communications* をみる限り、ハープ(サウン)・ワニ型ギター(ミジャウン)・ヴァイオリン(タヨー)の3種を贈ったビルマと、雅楽器を贈った日本の2ヶ国だけだったようである。S. M. タゴール自身も、1896年に上梓した『万国音楽史』*Universal History of Music*の「日本」の項において、前節で紹介した礼状の記載と同じ12種の雅楽器のリストを挙げ、それらが1878年に日本のミカドから贈られたものであることを注記し、同様に「ビルマ」の項では1878年にビルマ王から前述した楽器3種の寄贈を受けたと記している⁽⁹⁾。したがって、これらの楽器は少なくとも1896年まではカルカッタに現存した筈だが、その後の消息は未確認である。

そして、S. M. タゴールから日本に贈られた3種のインド楽器は、大正3年(1914)に当時の帝室博物館に下付され、東京国立博物館に現存することがわかった。このたび、調査の機会を得たので、つぎにその楽器の現状を報告する。

3 東京国立博物館所蔵のS.M.タゴール寄贈インド楽器

『東京国立博物館収蔵品目録(東洋美術・東洋考古・法隆寺献納物)』(昭和52年刊)の「金工(印度・インドネシア・タイ・東南アジア)」の部には、次の楽器3点が挙がっており、いずれも「スリンドロモフンタゴール寄贈」と記載されている。なお、楽器の呼称は、ここでは博物館での表記にしたがう。

ニヤスタラガ	2個	銀製	長44.8	口径2.5
キンナリピナ	1個	棹木製 ^(ママ) 銅駝鳥様卵殻製	駒象牙製	転手5個骨製
			全長92.4	
サラング	1個	胴木製	駒骨製	転手11本骨製
			共鳴線金属製	弓摩弦馬尾製
			全長52.6	

調査に際して御教示いただいた『東京国立博物館列品台帳』および『東京国立博物館列品記載簿』によると、これらの楽器は「明治十年(千八百七十七年)印度貴族スリンドロ、モフン、タゴール献納」の品で、「大正三年七月御下附」され東京国立博物館の前身である帝室博物館の「歴史部第十二区外国風俗」に収蔵された。当時の評価価格は、ニヤスタラガが100円、キンナリピナが250円、サラングが200円となっていた。献納時期を明治10年としているのは、先に見たようにS. M. タゴールの書簡の日付に拠ったものかと思われる。その後、昭和12年(1937)12月23日に区分改正につき旧歴史部より「金工」に編成替えられ、さらに昭和45年(1970)に番号が付け替えられて、現在の収蔵番号はニヤスタラガが[TE-753]、キンナリピナが[TE-754]、サラングが[TE-755]となっている。すなわち、これらの楽器は寄贈を受けた明治10年(1877)から大正3(1914)年までは皇室が所蔵していたが、おそらく代替わりに伴う献上品の整理によって博物館に下付されたものと考えられる。

これらのインド楽器が展覧会等を通じて一般に知られる機会はなかったのだろうか。列品記載簿等には出品履歴は記されないため、展示機会をすべて洗い出すのはむずかしい。一つには、大正12年(1923)の関東大震災まで、帝室博物館の「外国風俗」の常設展示に出品された可能性がありうるということだが、確認はできない。それ以外の展覧会への出品としては、昭和25年(1950)11月1日から7日まで国立国会図書館で行われた「音楽文化資料展覧会」に、3種の楽器が揃って展示されたことが確認できた⁽¹⁰⁾。したがって、この展覧会目録の解説に関わった田辺尚雄・秀雄をはじめ、展覧会を訪れた国内の研究者の目に、少なくとも一度はふれたはずである。しかし、「音楽文化資料展覧会」は日本音楽全体にかかわる楽器・文献を網羅して展示した、総出品数が817点にも及ぶ大展覧会であり、そのうち「第一部 音楽のはじ



写真1 C0095645 サランギ 姿

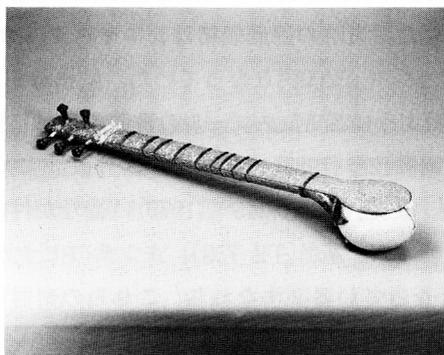


写真2 C0095647 キンナリビナ 姿



写真3 C0095649 ニヤスタラガ 姿

まり」の「附、参考楽器」だけでも26点が出品されていた。ここで、インド楽器3種がとくに注目されたとは考えにくい。また、目録の解説にも「印度十九世紀」とのみ記され、S. M. タゴールの寄贈品であるという由来はわからない。

3種の楽器は、寄贈時に楽器に合わせて作られたと思しい堅牢な箱にそれぞれ収められており、外側に「Japan」と「印度楽器／五箱ノ内」と書かれた紙片が貼られている。5箱といっても楽器箱は3箱しかなく、目録にもこれ以外にインド楽器はないことから、残る2箱は音楽書を収めたものではないかとも考えられるが、この点については後述する。

各楽器の形状は写真1～3で確認されたいが、楽器を実見して、キンナリピナとサランギについては演奏のための実用品というより、当初から「見る」ことを意識したきわめて美しく工芸品的な特注品という印象をもった。たとえば両者の転手(糸巻)には精巧な細工をほどこした銀製の金具が取り付けられ、サランギの胴には皮が張られておらず全面に箔絵漆がほどこされている。駝鳥の卵の殻を胴にしたキンナリピナには、銀製の爪入(真珠とガラス玉飾りのついた爪[ミズラープ]2個入り)と同じく銀製の弦入(弦2把と破損弦入り)が添えられ、サランギの弓の柄にも胴の内側に張られたものと共布の模様入りビロードが張られるなど、非常に凝った作りになっている。ただし、キンナリピナの弦5本とサランギの共鳴弦11本はほぼ破損し、サランギの弓の毛もほとんど失われている。またキンナリピナの駒は、剥落した跡が胴の上部に残っているものの、楽器箱にも見当たらず、失われたようである。

一方、ニヤスタラガ(2個)は銀製でほとんど模様はなく、金管楽器のような形状をしているが、吹口はふさがれ直径2ミリほどの小さな孔が穿たれているのみである。後述する音楽書中の *Short Notices of Hindu Musical Instruments* (1877) には、管楽器のように見えるが吹奏するのではなく、喉(声帯)や頬・鼻腔の上に置いて、一種の音響増幅器の役割をする世界にもほとんど類例のない楽器で、古くはウパンゴ Upanga と称した、と記述されている⁽¹¹⁾。この書自体、寄贈する楽器の説明書として刊行されたものではないかと考えられ、ニヤスタラガ Nyasataranga のほかキンナリピナ Kinnari vina、

サランギ Sarangi を含む166種の楽器(異称をのぞく)の説明があるのだが、日本では楽器と音楽書が別々の機関に収蔵されたため、この書も博物館では参照されなかったことになる。

このように見えてくると、日本に贈られた3種の楽器には、点数が少ないことも関係してか、インドでもとくに珍しい楽器、特別に作られた工芸的に美しい楽器が選ばれたように思われる。この点に関連して、今後、ヨーロッパ諸国に寄贈されたインド楽器との比較が行われ、寄贈用の楽器製作を S. M. タゴールがどこで誰に行わせたのか、日本にはなぜこの3種が贈られたのかなどの諸点が明らかにされることを望みたい。

つぎに、楽器とともに送付された音楽書を検討してみよう。

4 音楽取調掛蔵書中の「印度書」

はじめに述べたように、音楽取調掛蔵書中に、まとまった数のインド音楽関係書が含まれることは、1960年代に東京芸術大学で行われた音楽取調掛時代の資料調査で確認され、『音楽取調掛時代所蔵目録(1)』(1972年)には英文書名リストが掲載され、『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第1巻』(1987年)にも音楽取調掛最初期の蔵書として、インド音楽書の和文目録2種(甲号1~15、乙号1~26)が翻刻掲載されている⁽¹²⁾。しかし、これらが所蔵されるに至った詳しい経緯はこれまで解き明かされなかった。

東京芸術大学附属図書館蔵の音楽取調掛文書10『諸向往復文書綴』明治13年には、この年6月21日付で大坂専門学校校長・折田彦市(1849~1922)⁽¹³⁾から音楽取調掛長・伊沢修二(1851~1917)に宛てた以下の文書が収録されている。

第六百三号

印度カルカタ府スリンドロマホンタゴール氏ヨリ音楽書別紙甲号之通ハ
 明治十一年六月別紙乙号之通ハ本年五月寄贈有之候処右ハ貴所ニ於テ御
 参考□相成□ノト存候間及御贈付候尤モ右書籍ハ本日三菱廻送便ニ付シ
 相□候条到着之上ハ御落掌有之度□□申進候也

大坂専門学校

明治十三年六月廿一日

折田 彦市 (印)

音楽取調掛

伊澤 修二殿

(□は虫食いによる判読不能箇所)

ここから、S. M. タゴールの寄贈品のうち音楽書は、明治11年(1878) 6月に大坂専門学校の前身である大坂英語学校⁽¹⁴⁾に寄贈されたこと(別紙甲号目録の15点)、その後、明治13年(1880) 5月に別紙乙号目録にある26点がふたたび大坂専門学校に寄贈されたこと、がわかる。すなわち、楽器とともに贈られた音楽書とは別に、2年後にふたたび音楽書1組がS. M. タゴールから寄贈されたのである(ただし重複本をふくむ)。これに対し、伊沢は7月5日付で無事に領収した旨の文書を大坂専門学校の折田に宛て送付した。

すでに見たように、S. M. タゴールから楽器と音楽書が届いた明治11年には、まだ音楽取調掛は設置されていなかった。音楽を専門とする国内の機関といえば式部寮雅楽課があるのみで、そのためパリ万国博覧会の音楽展示への出品も雅楽課に要請されたのである。しかし、式部寮雅楽課は宮中の楽事を掌る実務機関であって、インド音楽にかかわる英語やベンガル語の書籍の受入先としては適当でない。そのため、音楽書は文部省を介して、文部省管轄下の学校に寄贈されたのではないだろうか。しかも、明治11年に到着した音楽書は、実は2組あったのではないかと考えられる。

というのは、*Public Opinion and Official Communications* に、1878年(皇紀2538年) 5月24日付の東京大学法学部理学部文学部からの音楽書寄贈に対する礼状が掲載され、そこに東京芸術大学附属図書館所蔵の甲号目録と一致する15点のリストが添えられているからである⁽¹⁵⁾。ヨーロッパ諸国への寄贈でも、たとえばドイツのライプツィヒ大学図書館とベルリンの王立図書館から個々に礼状が送られている例があり、同一機関に対して追加寄贈した例も見られるので、音楽書については1国に複数セット寄贈したことが十分考えられる。東京国立博物館に所蔵される楽器の箱に貼付された「印度楽器／五箱ノ内」という紙片の記載も考え合わせると、「五箱」のうち2箱には音楽書が一組ずつ入っていた可能性もありうるのではないだろうか⁽¹⁶⁾。

表1 東京芸術大学附属図書館所蔵 インド音楽書

番号		書名	刊年	請求記号	蔵書印、備考
甲号1	印度音楽ノ理論	Sangita sara sangraha	1875	G929/Ta18-4/ aT	「文」「大」「音」
甲号2	印度楽器略説	Short notices of Hindu musical instruments	1877	M253/Ta18-2/ T	「文」「大」「音」
甲号3	ブコラ、オ、イチハサ	Bhugola-o-itihasa ghatita brittanta (Part 1. Europe)	1877	G929/Ta18-3	「文」「大」「音」
甲号4	マラビカゲニミタ	Malabikgnimitra : a drama in five acts (second edition)	1877	G929/Ka29/a	「文」「大」「音」
甲号5	印度演劇論	Bharatiya natya rahasya, or A treatise on Hindu drama	1878	G929/Ta18-2	「文」「大」「音」
甲号6	公報及輿論	Public opinion and official communications	1876	M623/C13-1/ AT	「文」「大」「音」 158p. (1878年1月札状まで収録)
甲号7	ベンガル音楽学校第5及第6年報	Fifth and sixth annual reports of the Bengal Music School	1878	M623/C13-2	「文」「大」「音」 1875-77年の年報
甲号8	諸家印度音楽説	Hindu music from various authors	1875	-	大正12年9月1日関東大震災で焼失
甲号9	ベンガル文英国略史	Victoria-giti-mala, or A brief history of England in Bengali verses (Part 1)	1877	GBd/I39-5	「文」「大」「音」
甲号10	印度詩類	Victoria Samrajyan, or Sanskrit stanzas on the various dependencies of the British crown	1876	GBd/I39-4	「文」「大」「音」 五線譜ふくむ
甲号11	風琴略論	Harmonium-Sutra, or A treatise on harmonium	1874	M223.6/T18-5	「文」「大」「音」
甲号12	印度音楽	Hindu music. Reprinted from the "Hindoo Patriot," September 7, 1874	1874	M223.6/H61/T	「文」「音」「大」なし) 五線譜例示ふくむ
甲号13	ヤントラ コシヤ	Yantra Kosha, or A treasury of the musical instruments of ancient and of modern India, and of various other countries	1875	M253/T18	「文」「大」「音」
甲号14	タゴレ家略伝	A brief account of the Tagore Family	-	M231.4/Ta18/a	「文」「音」「大」なし) 巻末系図に Joteendro Mohun と Sourindro Mohun を手書で追加
甲号15	オーエンメレデス古記	A few lyrics of Owen Meredith	1877	GBd/I39-2	「文」「大」「音」 五線譜ふくむ
乙号1	セクス プリンシバル ラガス(印度音楽ノ略論)	Six principal ragas, with a brief view of Hindu music	1877	M223.6/Ta18/ T	「文」「音」 図版あり
乙号2	エイツ プリンシバル ラガス(印	The eight principal ragas of the Hindus, with Murtti and	1879	M223.6/T18-2	「文」「音」 五線譜、図版ふくむ

	度演劇論)	Vrindaka, or Tableaux and dramatic pieces, illustrating their character			
乙号3	テン プリンシパ ル アワタス(印 度演劇略史)	The ten principal avatars of the Hindus, with a short history of each incarnation and directions for the representation or the Murttis as tableaux vivants	1880	M223.6/Ta18-3	「文」「音」なし)五線譜、図版ふくむ
乙号4	サンジタ サラ サングラハ(諸家 サンスクリット音 楽説)	Sangita sara sangraha	1875	G929/Ta18-4/ T	「文」「音」
乙号5	ヒンド ミュージ ック(諸家印度音 楽説)	Hindu music from various authors (Part 1.)	1875	M223.6/H612	「文」「音」
乙号6	ウヘニ サンハラ ナタカ(バラナ ラヤナ氏サンスク リット演劇論)	Veni-sanhara nataka, or The binding of the braid	1880	G929/B39	「文」「音」巻末に系図折込
乙号7	ヤントラ クセタ ラ デピカ(印度 音楽大意)	Yantra kshetra dipika, or A treatise on the "setar", containing the requisite rules for performing on the instrument, together with various exercises and two hundred and two airs	1879	M254.4/Ta18/ T	「文」「音」楽器図ふくむ
乙号8	ハモニヤム スト ラ(和音略論)	Harmonium-Sutra, or A treatise on harmonium	1874	M223.6/T18-5 /a	「文」「音」
乙号9	カウイ ラハスヤ ム	Kavi-rahasyam, or A root-lexikon within a poem by Bhatta Halayadha	1879	G929/H21	「文」「音」
乙号10	ヤントラ カシャ (古今印度ベンガ ル楽器略説)	Yantra Kosha, or A treasury of the musical instruments of ancient and of modern India, and of various other countries	1875	M253/T18/a	「文」「音」
乙号11	ブリーフ、ヒスト リー、ヲフ、エン ギランド(英国史 略)	Victoria-giti-mala, or A brief history of England, in Bengali verses (Part 1)	1877	GBd/139-5/a	「文」「音」
乙号12	マナサ ブジャナ ン(サンスクリッ ト詩韻)	Manasapujanam	1876 ?	G129/3	「文」「音」
乙号13	ローガル イリハ ス ガリタ プリ タタ(欧州地誌 略)	Bhugola-o-itihasa, ghatita brittanta (Part 1. Europe)	1877	G929/Ta18-3a	「文」「音」
乙号14	ムクタバリ ナテ カ(ベンガル演劇)	Muktavali Natika	1876 ?	G929/Mu27	「文」「音」

乙号15	マラビ カグニミ トラ ナタカ(サ ンスクリット演劇 ベンガル文譯)	Malabikgnimitra : a drama in five acts (second edition)	1877	G929/Ka29	「文」「音」
乙号16	ショルト、ノルテ ス、ヲフ、ヒンドー、 ミュージカル、イン ストリメント	Short notices of Hindu musi- cal instruments	1877	M253/Ta18-2/ aT	「文」「音」
乙号17	エ、フユー、ライ リック、ヲフ、 ラーエン、メレデ ス(ラーエン、メ レデス古記)	A few lyrics of Owen Meredith	1877	GBd/I39-2/a	「文」「音」五線譜ふく む
乙号18	ボラテヤ ナタヤ ラハスヤ(印度 演劇論)	Bharatiya natya rahasha, or A treatise on Hindu drama	1878	G929/Ta18-2/ a	「文」「音」
乙号19	ヒフテ ユーチン ス(五十調子類)	Fifty tunes, composed and set to music by S.M.Tagore	1878	GBd/I39-3	「文」「音」五線譜ふく む
乙号20	ジタワリ	Gitavali, or A Hindu manual of Indian vocal music	1878	M223.6/Ta18- 4	「文」「音」
乙号21	エ、ウーエデック、 ヒムン(ウーエデ ック詩類)	A Vedic hymn	1878	雑/7	「文」「音」五線譜
乙号22	エ、フユー、スベ シメン、ヲフ、イン ジャン、ソング ス(印度歌類集)	A few specimens of Indian songs	1879	GBd/I39	「文」「音」
乙号23	ウクトリヤ サム ラジャム	Victoria Samrajyan, or, San- skrit stanzas on the various dependencies of the British crown	1876	GBd/I39-4/a	「文」「音」五線譜ふく む
乙号24	サンジタ サラ	Sangita sara, or A treatise on Hindu music (second edition)	1879	M223.6/G692	「文」「音」
乙号25	エ、ブリーフ、ア カウント、ヲフ、 デ、タゴール、ハ ミレー(タゴール 家略伝)	A brief account of the Tagore Family	—	M231.4/Ta18	「文」「音」卷末系図に Joteendro Mohun と Sourindro Mohun 印 刷
乙号26	公報及輿論	Public opinion and official communications	1876	M623/C13-1/ T	「文」「音」290p. (1879 年9月札状まで収録)

* 蔵書印略号：「文」文部省書庫、「大」大坂英語学校書籍縦覧場印、「音」音楽取調掛章

ここで、明治11年に楽器3種とともに音楽書2組が届いたと仮定し、それらが東京大学と大坂英語学校に回付された理由を考えると、両者が英語書を多く含む音楽書の寄贈先にふさわしい、当時の最高学府であったからであろう。東京開成学校と東京医学校とを合して東京大学としたのは明治10年4月であり、このとき東京英語学校も東京大学予備門と改称された。東京大学1校しか大学のない時代に、寄贈先を東京以外からもう1つ選ぶと、かつての東京英語学校と同格で後の第三高等学校につながる大坂英語学校がもっとも適格だったのではないか。

現在、東京芸術大学附属図書館に所蔵されているインド音楽書は、表1にまとめた通りである。このうち、甲号目録に相当する書には、「文部省書庫」「大坂英語学校書籍縦覧場印」「音楽取調掛章」の蔵書印があり、乙号目録に相当する書には「文部省書庫」と「音楽取調掛章」の2印のみが捺されている。すなわち、明治13年5月に2度目の寄贈を受けた時点では、前年に音楽の専門研究機関である音楽取調掛が設置されすでに活動を始めていたので、届いたばかりの乙号の音楽書26冊に大坂専門学校の蔵書印を捺す前に、明治11年6月寄贈分15冊と合わせて音楽取調掛に回付したものと思われる。

そして、その背景には、同じ文部官僚である伊沢修二が音楽取調掛の責任者となった後を受け、それまで伊沢が担当していた体操伝習所主幹を明治12年10月に引き継いだ折田彦市が、明治13年5月に大坂専門学校に赴任するという、絶妙のタイミングがあった。文書中の「貴所ニ於テ御参考□相成□ノト存候間及御贈付候」という文言が、旧知の2人ならではの機微を物語っているようにも思われる。その結果、音楽取調掛は、1880年以前に出版されたS. M. タゴールの著作のほとんどを所蔵することになったのである。

明治11年寄贈本の全15点の中には、本稿でたびたび引用している *Public Opinion and Official Communications* とベンガル音楽学校の1875~77年の年報のような編纂物のほかに、タゴール家の家系説明書や、ベンガル音楽学校で教科書として使用されていた、S. M. タゴールのシタールの師 K. M. ゴースワミーの著書 *Sangita Sara* (1868年初版、寄贈本は1879年刊の第2版) が含まれているが、それ以外はすべて S. M. タゴール自身のインド音楽に関する著作および楽譜である。明治13年寄贈本には、その後出版された

著作が追加されているほか、*Public Opinion and Official Communications* のように書名・刊年は同一でも内容が増補されているものもある。

日本の明治10年にあたる1877年は、ヴィクトリア女王が帝位につきインド帝国が成立して、イギリスのインド植民地支配が完成した年でもあった。ベンガルの名家に生まれたエリートである S. M. タゴールが、インド皇帝となったヴィクトリア女王を祝して献呈した *Victoria Samrajyan* (1876) や *Victoria-giti-mala* (1877)、インド帝国副王である総督リットン Edward Robert Bulwer-Lytton (筆名オーウェン・メレディス Owen Meredith, 1831~1891) の詩に作曲し献呈した *A few lyrics of Owen Meredith* (1877) 等は、イギリス植民地支配の拠点であったカルカッタで S. M. タゴールの置かれていた立場をはしなくも映し出す。

また、学校に音楽教育を導入する際の記譜法をめぐり、五線譜主義を唱える植民地官僚クラーク Charles Baron Clarke に対する S. M. タゴールの反論を掲載した1874年7月7日付ヒンドゥー・パトリオット紙記事のリプリント版や、彼らが推進しようとしていた独自の記譜法で書かれた楽譜をふくむ著作も、音楽取調掛に届いていた。さらに、S. M. タゴールが音楽取調掛より8年早く1871年に設立したベンガル音楽学校の年報に眼を通せば、音楽学校がインド音楽の教育を中心に据え、1877年7月31日現在で、器楽部4クラスと声楽部2クラスの計6クラスを有し、教師は7名、学生64名が在籍していたこと、などの情報も得られたはずであった⁽¹⁷⁾。

しかし、留学先のアメリカで L. W. メーソンを通して当時最新の音楽教育に接し、それを日本に移植しようとしていた伊沢修二や伊沢を補佐した神津専三郎らが、日本と同様にヨーロッパとは別の音楽伝統を有する同時代のインドで、しかもイギリスの植民地支配下で繰り返られていたこれらの営みを、日本で音楽取調掛が進めようとしていた西洋音楽に重心をおく形での「東西二洋ノ音楽ヲ折衷シテ新曲ヲ作ルコト」と比較したり、インドの経験を参照しようとする思考回路をもつことはなかったように思われる。メーソンを通じて実質的な関係を有していたニューイングランド音楽院のように、ベンガル音楽学校についての情報を積極的に求めた形跡もない。

その意味で、S. M. タゴールの音楽書は、音楽取調掛において積極的に活

用されることはなかったといえる。一方でそれは、イギリス植民地支配下に私財を投じて自らのアイデンティティの拠り所である音楽伝統を盛り立て、世界に発信することに全力を注いだS. M. タゴールと、一国の政策的選択として、ヨーロッパとは異なる状況下に成立したアメリカ型の音楽教育をモデルに国民教化のための音楽教育を推進しようとしていた伊沢らとの、置かれていた状況の決定的違いに由来するものであったろう。

むすびに代えて—近代におけるインドと日本の音楽交流事始め—

S. M. タゴールは、1870年代末から80年代にかけて、日本にもインド楽器と音楽書を寄贈していた。そして、約130年をへた現在も、関東大震災で焼失した分をのぞき、贈られた楽器と音楽書はともにほぼ無傷で、東京国立博物館と東京芸術大学附属図書館に収蔵されていることが確認された。考えてみると、これらが現存するのは、大正12年(1923)の関東大震災でも、昭和20年(1945)の東京大空襲でも大規模な被害を免れた上野という地に伝えられたためともいえる。

そして、日本から返礼を受け取ったカルカッタのS. M. タゴールに、明治維新を経て独立を保ちながら近代化を進めようとしていた極東の国に関する情報はどの程度届き、そしてどのように映っていたのか。今は『万国音楽史』の記述以外さしたる手がかりは見当たらないが、音楽取調掛が明治17年(1884)に刊行した『音楽取調成績申報書』中の「音楽沿革大綱」に見られる、「東西ノ音楽ハ印度ヲ以テ共同ノ大源トスベシ」という一文も気にかかる。この記述に影響を及ぼすような情報が陰になかったのかどうかは、1878年にインドに渡った雅楽器一揃の行方とともに、考えたい問題の1つである。

インドと日本との間には、中国・韓国・台湾などの東アジア諸国との間のような、留学生や植民地行政を通じた幅広い音楽交流は見られなかったが、その後も日本で製作されたヴァイオリンやオルガン、大正琴などの楽器の輸出先として、主要品目が電子キーボードやエレキ・ギターに切り替わった今日まで、主として楽器の輸出入を通じた関係が途切れずに継続している。

そして、改めて見直すならば、楽器の贈答と音楽書の寄贈という限られた

形であったとはいえ、近代のインドと日本との音楽交流の始まりが、この明治10年(1877)のS. M. タゴールによる企てによって開かれたという事実が、ここにくっきりと浮かび上がるのである。

註

- (1) 山住正己『唱歌教育成立過程の研究』東京大学出版会、1967年、60頁。明治13年(1880)7月29日付で文部省内記所に回付して登録を受けた楽譜および図書の総点数は184冊で、インド書はそのうちの41冊に上り、音楽取調掛最初期の蔵書の22.3パーセントを占める(『東京芸術大学100年史 東京音楽学校篇 第1巻』音楽之友社、1987年、33頁)。
- (2) 井上貴子『近代インドにおける音楽学と芸能の変容』青弓社、2006年、85~99頁。
- (3) ただし、キャプウェルは1986年の論文で、*Public Opinion and Official Communications* の記述に基づき、S. M. タゴールの著書がインド楽器とともに「北京、東京からニューヨークにまで贈られた」と指摘している(Charles Capwell: 'Musical Life in Nineteenth-Century Calcutta as a Component in the History of a Secondary Urban Center', *Asian Music*, xviii/1, 1986, p. 152.
- (4) 『明治天皇紀』第4、吉川弘文館、1970年、453頁。
- (5) *Public Opinion and official Communications*, p. 189所収。この文書を翻訳したのは、幕末から日本に滞在し、当時も英国公使館に勤務していたアーネスト・サトウ(1843~1929)であった。
- (6) 岩田通徳の経歴および1878年のパリ万国博覧会の音楽展示への出品経緯については、拙著『明治国家と雅楽—伝統の近代化/国楽の創成一』有志舎、2009年を参照。パリ万国博覧会の出品では楽譜作成などに芝葛鎮らの伶人もかかわったが、インドに贈達する楽器には全く関与しなかったらしく、『芝葛鎮日記』などにも関係記事は見えない。
- (7) 宮内庁書陵部蔵『雅楽録』明治11年第22号「仏国博覧会二本邦楽譜等出品ニ関スル件」。
- (8) *Public Opinion and Official Communications*, pp. 189-191.
- (9) S. M. Tagore, *Universal History of Music*, Calcutta, 1896, p. 35, p. 47.
- (10) 『音楽文化資料展覧会目録』国立国会図書館、1950年によれば、3種の楽器は陳列番号53「ニヤスタラガ」・同54「キンナピナ」^(マ)・同55「サランギ」として出品された。「第一部 音楽のはじまり」には「国立博物館蔵」の楽器

が合計23点(楽器10点、参考楽器13点)出品されており、日本音楽に関係するアジアの諸楽器を国立博物館(旧帝室博物館)からまとめて借り出したものと思われる。なお、昭和2年(1927)に帝室博物館で開かれた「楽器展示」および昭和17年(1942)に開催された「南方文化展」にはS. M. タゴール寄贈楽器は出品されていないことが目録から確認された。

- (11) S. M. Tagore, *Short Notices of Hindu Musical Instruments*, p. 28. この書の冒頭には、序 Introduction として楽器概観 General Survey of Musical Instruments がおかれ、その中に楽器の4分類法(Tata-yantra, Shushira-yantra, Ghana-yantra, Anaddha-yantra 弦鳴楽器、体鳴楽器、膜鳴楽器、気鳴楽器に相当)の説明も見られる(p. xxiii)。また、ベンガル音楽学校でシタールのクラスを担当した Kally Prosonno Banerji は、このニヤスタラガの演奏で国際的に有名であったという(Charles Capwell: 'Musical Life in Nineteenth-Century Calcutta as a Component in the History of a Secondary Urban Center', *Asian Music*, xviii/1, 1986, p. 145.)
- (12) 『音楽取調掛時代所蔵目録(1)』東京芸術大学附属図書館、1972年、および『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第1巻』音楽之友社、1987年、34～35頁。ただし、インド音楽書は、楽譜扱いとされた *A Vedic hymn* を除き、昭和45年度から48年度にかけてすべて製本処理されている。
- (13) 折田彦市は薩摩藩の出身で1870～76年アメリカに留学し、プリンストン大学を卒業した。帰国後は文部省に勤務、督学局、体操伝習所を経て、明治13年(1880)大坂専門学校に校長として赴任、制度改正ののち、明治27年(1894)第三高等学校発足時に校長となる。折田については、巖平『三高の見果てぬ夢—中等・高等教育成立過程と折田彦市—』思文閣出版、2008年を参照。
- (14) 明治7年(1874)、東京・愛知・大坂・広島・長崎・新潟・宮城に英語学校が設立され、このうち東京・大坂を除く五校は明治10年(1877)に廃止された。東京英語学校は明治10年4月に東京大学予備門となり、大坂英語学校は明治12年4月に大坂専門学校、明治13年12月に大阪中学校となる。その後、明治18年大学分校をへて、明治19年(1886)第三高等中学校を設置、明治27年(1894)第三高等学校に昇格し、折田彦市が初代校長を務めた(朝倉治彦編『明治官制辞典』東京堂出版、1969年)。
- (15) *Public Opinion and Official Communications*, pp. 179-180. 差出人の H. Rato Sori, President とは、東京大学法学部理学部文学部の総理であった加藤弘之のことであり、Rato は Kato の誤植であろう。ただし、S. M. タゴール寄贈本を引き継いだ東京帝国大学図書館は大正12年(1923)の関東大震災で火災

にあっており、現在の東京大学付属総合図書館の図書検索でも15冊のうち5冊しか見出せない。しかも、登録台帳によれば5冊はすべて震災後にオランダから寄贈されたものということであり、S. M. タゴールからの寄贈本は震災時に焼失した可能性が高い。東京芸術大学附属図書館所蔵本でも、甲号8の1冊は震災時に焼失した。

- (16) ただし、『明治天皇紀』の「印度楽器三種、音楽書一函」という記述とは矛盾する。
- (17) その内訳は、器楽部に、シタールの第1クラス(K. P. Banerji 担当、学生16名)、同第2クラス(R. P. Srutirutna 担当、学生11名)、ヴァイオリン・クラス(B. N. Chuckberbutty 担当、学生7名)、ムリダンガ・クラス(B. Charza 担当、学生7名)があり、声楽部には、第1クラス(H. C. Banerji, G. P. Misser 担当、学生12名)、第2クラス(M. M. Burmon 担当、学生11名)があって、R. P. Srutirutna はシタール第2クラスと全クラスの理論の兼任であった。

付記 本稿の作成にあたり、S. M. タゴール寄贈楽器の調査を御許可くださった東京国立博物館、S. M. タゴール寄贈本とその関連資料調査でたいへんお世話になった東京芸術大学附属図書館情報サービス係の馬場純子さん、同じくS. M. タゴール寄贈本についての照会にお答えいただいた東京大学付属総合図書館情報サービス係の松原恵さんに御礼申し上げます。

四半世紀以上に宮内庁書陵部で目にした「印度貴族「ツミンドロモハンタゴン」ヨリ同国楽器類献上ニ関スル件」を思い出し、本稿をまとめるに至ったのは、科研の調査でインドを初めて訪れたことがきっかけである。それまでインドとは全く接点のなかった私を、2004年と2008年の2度の楽器調査に伴い、東京国立博物館での調査にも同行され、数々の助言を下された京都教育大学の田中多佳子さんに感謝申し上げます。